

ドストエフスキイ研究会便り（23）

★今回は2005年に行われたシンポジウム（日本キリスト教文学会・第34回全国大会、札幌）での発表記録を掲載します。シンポジウムは「文学における〈虚無〉」というテーマの下に行われ、私は発話者の一人として「虚無としての腐臭」と題し、ドストエフスキイにおける虚無・ニヒリズムとその超克について問題提起をしました。発表から既に20年近く。今からすれば思索や論述の未熟さ、文体の堅さなど、不満なところが少なくないのですが、内容的には前回の「研究会便り（22）」（「デカダンスの光芒」）と直結するものであり、皆さんの継続的思索の参考になればと考え、掲載を決めました。

★40年近く前のシンポジウムと、20年近く前のシンポジウム——これら二つの問題提起を続けて読んで頂くと、ドストエフスキイが人間と世界とその歴史の奥深くに潜むデカダンス、或いは虚無・ニヒリズムの問題、殊に「死と復活」の問題と如何に真剣に向き合い、思索を続けた作家であったかがよく分かると思います。私は彼の思索は、『存在と時間』に於いて「死」の問題を正面から考察した哲学者ハイデガーのそれを遙かに凌ぐ深さを持つものであると思っています。今回のシンポジウムでは、この「死と復活」の問題を、『カラマーゾフの兄弟』のゾシマ長老と『罪と罰』のマルメラードフ、これら二人の死と腐臭を前にしたアリョーシャとソーニャに焦点を絞って検討することから始め、続いて『白痴』から『夏象冬記』へと創作の順序を逆に辿る形で、「死せるラザロ」と「死せるキリスト」復活の問題が、ドストエフスキイ文学に於ける一貫した中心軸であったことを確認してゆきます。

★今回は5ページに、ゴッホが最晩年に描いた「ラザロの復活」（1890）を、続いて8ページには、バーゼル美術館でドストエフスキイが衝撃を受けたH.ホルバインの絵画「（墓の中の）死せるキリスト」（1521）を掲載します。ドストエフスキイ文学が如何なる問題を扱う世界なのか、これらの絵画作品から具体的な実感を得つつ、また聖書を挟んだ絵画芸術と文学芸術の響き合いも味わいつつ、本論を読み進めて頂ければと思います。

★ヨハネ福音書・第十一章。ここに描かれた墓に横たわるラザロ。この墓の前で嘆き悲しむ姉妹マリアは、イエスに訴えます。「主よ、彼ははや臭し、四日を経たればなり」（十一 39）——ここから読み取れるのはマリアの深い絶望であり、「死せるラザロ」復活への必死の希求です。しかし我々がこの物語から何よりもまず受け取るべきは、墓の中で腐臭を放つ「死せるラザロ」とは、他ならぬこの自分ではないかという問いであり、その自覚ではないでしょうか？ ドストエフスキイその人が、この問いと自覚とを生涯自らの背に負い、思索を続けた人だったのです。

日本キリスト教文学会・シンポジウム・「文学における〈虚無〉」・問題提起

虚無としての腐臭

芦川進一

目次	ページ
1. はじめに	
— 死、虚無との出会い —	3
2. 『カラマーゾフの兄弟』	
— ソシマ長老の腐臭とアリョーシャ	3
3. 『罪と罰』	
— マルメラードフの腐臭とソーニャ —	4
4. 『白痴』における「死せるキリスト」	
— 自然律の支配と復活、近代との対決 —	8
5. 『夏象冬記』の旅	
— 墓場としての西欧、「ラザロの復活」の登場 —	9
6. 死と腐臭	
— 「ラザロの復活」が示すもの —	11
関係する論考	13
次回の「ドストエフスキ研究会便り」について	15

★ここに掲載した文章は、日本キリスト教文学会・第34回全国大会(2005)に於けるシンポジウムでの問題提起を原稿化したもので、翌年、同会から発行された『キリスト教文学会』第23号に掲載されました。今回の掲載にあたっては、まず誤植の訂正に加え、表記の統一や小見出しの一部訂正を図りました。20年近く前の考察であり、シンポジウムでの「話し言葉」とは違って、雑誌に掲載した文章は、今から思えば必要以上に「堅い文体」に思えます。また内容的にも現在の視点と異なる視点が少なくなく、全面的に書き換えたいとの気持ちに強く領されたのですが、ごく一部の加筆・修正以外は、前回の「研究会便り(22)」と同様に、今改めて説明が必要と思われる部分に(★)印を付け、本文の外に最小限の「付説」欄を設けました。

虚無としての腐臭

1. はじめに

— 死、虚無との出会い —

死体は死の抽象性を具体化し、我々に提示する。愛するものの死であれ、全く無縁な他人の死であれ、我々にとって日ごろ遠い存在であった死は、突如死体という形で具体的にかつ厳然と我々の目の前に姿を現わし、その死体の手応えと感触とは、まずは残酷なまでのリアリティをもった虚無の感覚である。

このような「死」が、中学時代の私に突然、「祖父の死」として具体的な形をとって現われた。絶対静止の死体。そこから吹き寄せてくる恐怖。人間は死んで、こうなる！ 焼き場で祖父の骨を拾いつつ思った。恐ろしいものが人生には待っている！ 田舎の子供が抱いていた高度成長期的な夢は微塵に吹き飛んだ。死の持つ虚無が、私の人生に登場したのだ。

長い混乱の中で、私は「永遠」という言葉に行き当たった。ある伝道協会が高校に配布していった英和对訳聖書。何気なくめくった『ヨハネ伝』にあった「永遠の生命」という言葉。自分が知りたいのは、これかもしれない。死を超えた永遠の生命、この「永遠」という言葉が持つ不思議な力に魅せられ、私は哲学を志した。

大学時代、哲学の師がふと洩らされた。「痛みとは絶対の虚無だ。そのものに何の意味もない。痛みに意味があるとすれば、癒しがもたらされる契機としての痛みのみだ」—— この時、長い課題に一つの突破口が開けた思いがした。「一切か無か」という排中律の論理の一方で、「一切が無に」「無が一切に」という逆説の論理も存在する！ この後者の論理がこの時、自分の内に飛び込んできたように思った。死自体は恐ろしく、忌まわしく、そして悲しい。死自体、死体自体を愛する者はまずいない。だが死という「虚無」を前にして、人は不安や恐怖や絶望や悲しみと共に、死を超えた「永遠」を求める切実な希求に取り憑かれもする。死という虚無をも包み込んだ更に大きな意味、「一切が無に」そして「無が一切に」というその全体性に於いて、生は捉えられるのではないか。

2. 『カラマーゾフの兄弟』

— ゴシマ長老の腐臭とアリョーシャ —

同じ頃、大学紛争に投げ込まれた。バリケード封鎖されたキャンパス。ここを支配しているものは、虚ろな権威にしがみついた教授たちが追放された解放感と、取って代わって学生たちの未熟さが生み出す空虚感だった。この中で果てしなく繰り返されるであろう暴力と憎悪。その悪循環から生まれるものは何も無い。社会と大学の内に新たに見出した「虚無」。

ドストエフスキイとの真の出会いは、この時だった。私は『カラマーゾフの兄弟』の「ガリラヤのカナ」に胸を揺さぶられた。聖者ゾシマ長老の死。その死体が放ち始めた腐臭。人々の期待する奇蹟とは逆の、想像もしなかった醜悪な現実。—— 更に墮落の底へ！ 絶望に陥った青年アリョーシャは、「娼婦」グルーシェニカの許を訪れる。しかしここで彼が見出したのは、ゾシマ長老の死を知って悲しむ純粋な一つの魂だった。

地獄の中で与えられた「一本の葱」。彼の前に「広く真直ぐで、明るく水晶のように澄み切った道」が開かれる。腐臭を放つゾシマの庵室に戻った彼は、パーシー神父が朗読する「ガリラヤのカナ」（『ヨハネ伝』第2章）と共に、婚宴の場に導かれる。そこには復活したイエス・キリストと共に、彼を喜びの宴に招く復活のゾシマが待っていた。続く満天の星空の下での大地への抱擁。アリョーシャを領する神の君臨感覚・・・具体的なリアリズムの積み重ねの上に描かれた、これこそ正に奇蹟と言うべき神秘的場面と思われた。死とその虚無を通り抜けて、人はこれほど深く感動的な魂の再生と永遠を味わい、その喜びを表現することが可能なのか・・・

冒頭に敢えて自分自身の個人的な体験を語らせて頂いた。いささか抽象的な今回のテーマに、具体的な「叩き台」を提供出来ればと思ったからである。以下ではこの延長線上に、「ドストエフスキイ文学における虚無」について問題提起をしたい。

※ ※ ※

3. 『罪と罰』

— マルメラードフの腐臭とソーニャ —

「死」と「腐臭」、そして「腐臭」を超えた「復活」。——遺作『カラマーゾフの兄弟』（1880）に於いて完成を見るこのテーマを、ドストエフスキイは既に『罪と罰』（1866）に於いて、全編を支える中心テーマとして描いている。死と腐臭からの「ラザロの復活」のドラマである。しかもこれは『罪と罰』に於いて、ラスコーリニコフやマルメラードフのみならず、ニヒリスト・スヴィドリガイロフも辿るドラマであり、更には「聖なる娼婦」ソーニャさえもが、「行き場のない」地獄の底で、新たな信仰の確かさと出会う決定的な契機として配置されているのである。アリョーシャの出発点はソーニャである。

「ラザロの復活」を殺人犯に読み聞かせる「聖なる娼婦」ソーニャ。しかしそもそもソーニャが「ラザロの復活」を朗読する切っ掛けは、彼女の意志からではなく、ラスコーリニコフからのたつての要請であった。彼はその日、予審判事ポルフィーリィとの初めての対決で、「あなたはラザロの復活を信じておいでですか？」と問われ、咄嗟に「はい」と答えてしまったのだ。しかしソーニャとの会話から明らかになるように、実は彼は『新約聖書』のことなど殆ど何も知らず、「ラザロの復活」が『ヨハネ伝』にあることさえも知らない。それほどまでに宗教的伝統から切り離された現代青年として、ラスコーリニコフは造型されているのだ。「ラザロの復活」を朗読するソーニャの胸の高鳴りと動揺の内に、それゆえ我々は、単に殺人犯に聖書を読み聞かせる聖女の感動ではなく（そもそも彼がソーニャに殺人を告白するのは、その翌日である）、むしろ「ラザロ」に激しく反応する必然を抱えるソーニャの人間ドラマをこそ読み取る必要があるのだ。



本 大英博物館蔵 1890年作 油絵、101.5×130.5cm、ロンドン、国立美術館蔵、ラザロの復活、J.M.W. Turner、1890年作、油絵、101.5×130.5cm、ロンドン、国立美術館蔵

「ラザロの復活」(1890)、 V. van ゴッホ [1853-90]

「ラザロの復活」朗読に至るソーニャの一日を見てみよう。

それは激動の一日であった。前夜の父マルメラードフの死。彼女が駆けつける前に、馬車に轢かれた父を住まいに運び込み、医者から僧侶の手配までしてくれた末に、少なからぬ金を置いて去ったのがラスコーリニコフであった。翌日の葬式の準備。義母に請われ、ソーニャがラスコーリニコフの下宿を訪問したのは昼ごろである。来訪の目的は昨夜ラスコーリニコフがしてくれたこと、また残していった金への礼を述べ、追善法要への出席を依頼するためであった。折しもその場には、ラスコーリニコフの母と妹のドゥーニャに加え、友人のラズーミヒンも居合わせていた。気まずい雰囲気の中、ラスコーリニコフからその後何か問題は生じなかったかと問われ、ソーニャは報告をする。—— 父の死体が暑さのため腐臭を発したこと。住民からの苦情もあり、晩の礼拝式の後、棺を墓地の礼拝堂に移す予定であること。

注目すべきは、この訪問でソーニャが、ラスコーリニコフが金持ちの青年どころか、貧困の極にいる青年だと知ったことである。「昨夜あなたは、お持ち合わせの全てを下さったのですね」。—— この言葉の内には、「行き場のない」地獄で、もう一人の「善きサマリア人」と出会った彼女の感動が込められている。ラスコーリニコフは押し黙ったままだ。しかし感動はたちどころに伝播する。瞬間、妹ドゥーニャの目が輝き、母も「丁寧とさえいえるほどの視線」をソーニャに向けるのだった。母から「まるで棺の中のよう」と言われた屋根裏部屋。ここで今、全員の心と心が通い合う。『罪と罰』で最も感動的な場面の一つ、地獄に「一本の葱」が誕生する瞬間である。

さて住まいに戻ったソーニャは、言葉通り、晩の礼拝式を終えて、腐臭を発する父の棺を墓地の礼拝堂に移送する。そして夜の九時を過ぎて、街角に立つ。父の葬式を翌日に控えた晩も、彼女の為すべき仕事は、残された家族のために日々のパンを稼ぐことであった。しかしこの街角で、彼女は父の姿を目撃する。墓地の礼拝堂で腐臭を放っているはずの父が今、自分の眼の前を歩いて行くのだ！ 動揺のあまり母の許に寄ろうとした彼女は、しかし結局住まいに戻る。そしてこの出来事を一人心中で反芻し続ける彼女の許を、夜の十一時を過ぎて、ラスコーリニコフが訪れるのである。

ラスコーリニコフの口から父マルメラードフの名が出るや、ソーニャは直ちにこの出来事を告げようとする。しかし青年の反応は冷たかった。「あなたは街角に立っていたのですね」。殺人ゆえにパニックに陥った彼は、ソーニャの内でのどのような激動のドラマが展開しているかなどに、心に向ける余裕はなかったのだ。

ソーニャに冷酷な質問の嵐を浴びせる彼が、ふと筆筒の上にあった一冊の本に目を止める。リザベータから贈られた『新約聖書』であった。「ラザロはどの辺りですか？」。「見つけて、読んでくれませんか？」。この瞬間のソーニャの驚きと感動は想像に余るものがある。ソーニャはこの時、この日自分が体験したことの全てを、この青年を介して、「ラザロの復活」として読み直せとの天来の声を聞いたのだ。この聖書朗読は、何

よりもまず、ソーニャ自身のためにあったと言えよう。

「私自身がラザロでした。

そしてキリスト様が私を甦らせて下さったのです」

これは『罪と罰』の「創作ノート」に記されたソーニャの言葉である。出来合いの「信仰」とは一切無縁のところ、一人一人の人間の魂の試練の内に、具体的な「信」の生成のドラマを追求するドストエフスキイの創造の現場が、この「ラザロの復活」朗読の内にはある。ここには、あの「ガリラヤのカナ」の原型が既にそのまま誕生していることも確認出来るであろう。「死」と「腐臭」、そして「腐臭」を超える「一本の葱」(★)と「復活」——ドストエフスキイの宗教的認識と創作を貫く原型である。

★「一本の葱」について、簡単に説明しておきます。

前述のように、『カラマーゾフの兄弟』に於いて、聖者ゾシマ長老の腐臭が人々の間に呼び起こしたスキャンダル、「聖者の失墜」劇によって、アリョーシャは「神の世界」に絶望し、ラキーチンに導かれ、「毒を食らはば皿までも」と、「娼婦」グルーシェニカの許に乗り込みます。しかしここで彼が出会ったのは、ゾシマ長老の死を知った瞬間、叫び声を上げて飛び上がり、その死を心から悲しむグルーシェニカでした。地獄の底で、アリョーシャは彼女が内に宿す愛と純真さ、「一本の葱」を与えられ、甦ったのです。

この直後アリョーシャは、パーシィ神父が朗読する「ガリラヤのカナ」(ヨハネ二 1-11)を遠く聴きながら、復活のイエス・キリストの傍らで彼を招くゾシマ長老と出会い、長老から「一本の葱を与えること」を生涯の仕事とするよう改めて命じられます。ここにはゾシマ長老の復活も描かれていることに注意すべきでしょう。『カラマーゾフの兄弟』に於いて「一本の葱」は、「実行的な愛」とも「キリストの愛」とも呼ばれます。それは人間疎外と神疎外の進行するこの世界で、イエス・キリストに倣って自らの十字架を負い、愛に生きることで、人間が死を超えた「永遠の生命」を与えられることの象徴として、この作品の最も重要な「誠め」、中心メッセージとなります。愛の人ソーニャを遠く受けて、グルーシェニカもまた、彼女自身の「行き場のない」地獄において、死を乗り越える愛を宿す存在、躓きの内にあったアリョーシャに「一本の葱」を与える存在として、この作品に於いて決定的な役割を演じるのです。

私がこのシンポジウムや、続く『罪と罰』論で強調したのは、この基本的メッセージが『罪と罰』に於けるソーニャの人物造型の内に、つまりこの女性の魂が宿す愛と純真さ、父マルメラードフの死と腐臭を巡るドラマの内に、既に完膚無き迄に表現されているということでした。



「(墓の中の)死せるキリスト」(1521)、 H. ホルバイン(1497-1543)

4. 『白痴』における「死せるキリスト」

— 自然律の支配と復活、近代との対決 —

ドストエフスキの「死」と「腐臭」へのこだわりは、『罪と罰』の次作『白痴』(1867)に於いても、H. ホルバインの絵画「(墓の中の)死せるキリスト」(1521)のテーマとして跡付けられる。

死を間近に控えた青年イッポリートは、ホルバインが描いた「死せるキリスト」のリアリズムに魂を震撼させられる。その死体描写の生々しさ。顎は上がり、口は半ば開き、目は虚空を睨む死体。ホルバイン自身、中世がルネッサンスに移行する中で切り拓かれたリアリズムの最先端にいる画家の一人であり、この「死せるキリスト」も、水死人の克明なスケッチを土台に描かれたとされる。イッポリートは自らが若くして迎えねばならない「死」という現実を、このイエスの死体に於いて露骨に拡大させられ直視させられ、その懼ろしさと悍ましさに震撼させられたのだ。ここに直接「腐臭」ないしは「死臭」という問題は取り上げられない。しかしイッポリートがホルバインの絵から突きつけられたものとは、「死せるキリスト」が放つ正に「腐臭」であり、死の持つ残酷さと忌わしさ、「虚無」そのものの懼るべき現前だったのである。彼は記す。

「死というものがこんなにも恐ろしいものであり、自然律がこんなにも強固なものであるとするならば、どうしてそれに打ち勝てるというのか？ 地上にある間は自然に打ち勝ち、それを屈服させ、《タリタ・クミ》と叫べば少女は起き上り、《ラザロよ、出よ》と叫べば死者が歩き出したというキリスト、このキリストでさえ遂には打ち勝てなかった自然律に、どうして打ち勝つことが出来るのか？」

注目すべきはイッポリートが、イエスの死体の内に「自然律」の厳然たる支配を読み取っていることである。死せるラザロを甦らせ、ヤイロスの娘も生き返らせたあの力ある存在でさえ、いざ死が自らを迎えるや、厳然として残酷な「自然律」の支配下に置かれる。このイエスの死体が果たして復活し得るのか？ —— ここには近世以来、ヨーロッパが魅せられてきた科学的・合理的・実証的精神の持つ問題のエッセンスが込められていると言えよう。「自然律」の象徴としての「 $2 \times 2 = 4$ 」。この数学的・合理的精神を前に、「死」と「腐臭」を超えた「復活」という生命の根源的なリズムは計量化不可能だとして否定される。この西欧近代が前面に押し出す「自然律」を乗り越える力として、「死せるキリスト」の復活はなおもあり得るのか？ この問いの内に、ドストエフスキの思索の課題が極限まで煮詰められた形で見て取れると言えよう。

『白痴』に於いて終局描かれるのは、ナスターシャの死体を前に抱き合う、再び白痴に戻った「キリスト公爵」ムイシュキンと殺人者ラゴージンの悍ましい姿である。死を超えた「しんじつ美しい人間」の創造は失敗に終わる。イッポリアートの恐怖と懐疑は遂に克服されることなく、全ては「自然律」の支配に呑み込まれて終わるのだ。

我々はここに、イエスその人の死をも新たに「自然律」という虚無の支配下に投げ出し、改めてそこから復活の可能性を追求するドストエフスキの、近代人としての懐疑と病の深さ、そして真摯さを認め得るであろう。この『白痴』の後、『カラマーゾフの兄弟』に於ける「ガリラヤのカナ」を中心とした、アリョーシャの一連の回心体験に至るまでの十年余、ドストエフスキは『悪霊』(1871)と『未成年』(1876)の創作という、長い試行錯誤の旅を続けるのである。

5. 『夏象冬記』の旅

— 墓場としての西欧、「ラザロの復活」の登場 —

「死」と「腐臭」、そしてそこからの「復活」。このテーマがドストエフスキ文学に本格的に降り立った現場も確認しておこう。それは彼が四十歳を超えて1862年、初

めて訪れたロンドンとパリを中心とする西欧旅行の報告記『夏象冬記』(1863)に於いてである。この旅でドストエフスキイは、ロンドンで猛烈な勢いで進行する産業革命の現場を目撃し愕然とする。近代ヨーロッパの科学的・実証的・合理的精神は、この都市ロンドンに大規模な万国博覧会を現出させ、翌年には世界初の地下鉄さえ開通させようとしていた。「 $2 \times 2 = 4$ 」の精神の華々しい勝利である。しかし、それは有用性と利益を最優先とする功利的産業中心主義の支配を意味し、更にその精神は弱肉強食を旨とする資本主義・帝国主義として世界に展開し、弱者・弱小国を犠牲者として社会と歴史の片隅に追いやるといふ19世紀的無法を生みつつあった。ドストエフスキイはこのロンドンの街を異教神「バアル」が傲然と支配する街だと断言する。

一方、相対的安定期に入ったナポレオン三世治下のフランスでは、フランス革命によって権益を得た第三身分の市民たちが、着々とプチ・ブルとしての地位と安定を確立しつつあった。ボードレールが「家畜」として軽蔑したこのプチ・ブルたちについて、ドストエフスキイも彼らの精神は「縮こまっている」と断じ、彼らを支配するものは「美德」の仮面の下に、ひたすら「小銭」を追い求める偽善者の精神でしかないとする。彼によれば、パリを支配するのはこの「縮こまる」精神と、その元締めたる「小銭の神」・「マモン神」に他ならない。後に『カラマーゾフの兄弟』のイワンが「墓場」と呼ぶ西欧世界の本質は、この『夏象冬記』で的確に見抜かれ、「バアル」と「マモン」という異教神(サタン)たちの支配する街「バビロン」として捉えられたのである。

ここからドストエフスキイが訴えるもの——それはまずバアル神に対する「何世紀にもわたる精神的抵抗と否定」の必要である。異教神に魂を抜き取られたヨーロッパ、このヨーロッパを弾劾し、地下室的抵抗の精神を訴えるドストエフスキイの筆は終末論的雰囲気と預言者の弾劾の激しさに満ち、鋭く厳しい。

このバアルに対する「精神的抵抗と否定」の必要と共に、ドストエフスキイが行き着くもう一つの極とは、ヨーロッパの個人主義が決して知り得なかった「自己犠牲の精神」、一切を他者のために投げ出し十字架につくイエス・キリストの精神である。バアルという異教神に対する「精神的抵抗と否定」が、「完全なる自己犠牲の精神」(★)の上になされるといふ逆説。後のドストエフスキイ文学とは、この矛盾の両立を目指して築き上げられる逆説の世界と言えるであろう。

★この「完全なる自己犠牲の精神」が、間もなく『罪と罰』に於いて「全てを与える」ソーニャとして、やがて『カラマーゾフの兄弟』に於いては「一本の葱」を与えるグルーシェニカとして造型されるでしょう。この愛の精神は「一本の葱」以外にも「実行的な愛」とも「キリストの愛」とも呼ばれ、先の「付説」(7ページ)で記したように、人間疎外と神疎外の進行する「行き場のない」世界で、イエス・キリストに倣って自らの十字架を負うことで、人間が死を超えた「永遠の生命」を付与されることの象徴として、ドストエフスキイ文学の中心メッセージとなってゆきます。

ある晩ドストエフスキイは、ロンドンの売春街・ヘイ・マーケットを訪れる。この街角で、黒づくめの衣装に身を包んだ伝道女が一枚の聖書パンフレットを手渡す。そこには「我は命なり、復活なり。汝これを信じるか？」という聖句が記されていた。『ヨハネ伝』第十一章 25-26、「ラザロの復活」からの引用である。これが例のカトリックの伝道なのだ！連中は世界中のどこへでも出かけ、自分の支配をひたすら拡大しようとするのだ！——この時のドストエフスキイは、パンフレットの内容自体の検討に進むことよりも、目の前の悲惨さを救う意思も力もない既成宗教への皮肉と弾劾に向かう。ドストエフスキイが「ラザロの復活」に込められた「死」と「腐臭」と、それからの「復活」のドラマに焦点を合わせ、それを彼が目撃した西欧精神の死と重ね合わせ、新たに「死からの復活」の可能性を追求し考察してゆくのは『地下生活者の手記』（1864）と、それに続く『罪と罰』からである（★）。

★ドストエフスキイ文学における『夏象冬記』の重要性について、筆者は前回の「研究会便り（22）」でも注意を喚起しましたが、「研究会便り」第15回では正面から扱い、単行本としては『墮ちた苦艾の星—ドストエフスキイと福沢諭吉—』（河合文化教育研究所、1997）があります。これらを参考にしつつ、ドストエフスキイ世界を理解するための must として、是非この旅行記と取り組むことをお勧めします。

6. 死と腐臭

—「ラザロの復活」が示すもの—

以上我々は「ドストエフスキイ文学における虚無」のテーマを、具体的に「死」と「腐臭」、そして「復活」のテーマに絞り込み、このテーマが『夏象冬記』以来、『罪と罰』や『白痴』を経て『カラマーゾフの兄弟』に至るまで、彼の文学を太く貫く一本の主要な縦糸であることを確認してきた。ドストエフスキイは人の具体的な死と腐臭の内に、「一切を無に」する「虚無」の現われを誰よりも敏感に見て取る人であった。同時に彼はその「虚無」からの解放、「無が一切に」転じ、「永遠」が現出する瞬間を誰よりも強く切望し、描こうとした人でもあったと言えよう。

最後に改めて確認しておくべきことは、ドストエフスキイに於いてはこの「虚無」からの解放、「死からの復活」の問題が、具体的に「ラザロの復活」のテーマとして、「完全なる自己犠牲の精神」と相俟って、『新約聖書』の世界と連なり、究極的には彼のイ

イエス像探究の課題と不可分かつユニークに結びついているという事実である。『夏象冬記』に於いて初めてドストエフスキイ文学の世界に登場した「ラザロの復活」は、『罪と罰』に於いて、先にソーニャの例で見たように、決してお決まりの聖書語句の引用の次元に納まることはなかった。死して腐臭を発するのは、酔漢マルメラードフや殺人犯ラスコーリニコフのみでなく、またニヒリスト・スヴィドリガイロフに留まらず、他ならぬソーニャその人さえもが抱える運命であり、彼ら一人一人が「ラザロ」として旧き生を死に、「完全なる自己犠牲の精神」を具体的に生きる存在として、つまりは新たな甦りを希求する存在として描かれてゆくのである。

このことは『白痴』に於いて更に激しく悲劇的に表現される。ここではあのイエスさえもが恐ろしい死の手に捕らえられ、「死せるキリスト」として「自然律」の支配の下にやがて腐敗の運命を辿るとされ、その復活の可能性も懐疑の下に放り込まれてしまうのだ。これは死の持つ力・虚無の力を人類近代の問題と重ね、胡麻化さず見つめ対決し続けたドストエフスキイにして初めて可能な、大胆かつユニークで誠実な思索であり懐疑であると言えよう。死として、また腐臭として具体化する虚無は、「死せるラザロ」復活の問題と共に、キリスト教成立の根幹をなす「死せるキリスト」の復活自体への懐疑という極限にまでドストエフスキイを導くのだ。

そしてこの懐疑に身を委ねたドストエフスキイは、『白痴』から『悪霊』・『未成年』へと、なお十年以上の試行錯誤を続けた後、『カラマーゾフの兄弟』に至ってようやく、グルーシェニカを介し、アリョーシャの前に現われるゾシマ長老とイエス・キリストの復活体を描き、存在の究極を支配する喜び、「祝宴」の確認を以ってその生涯の課題を解き終え、数十日後にこの世を去るのである。

我々人間一人一人を、そして文明の運命をさえ、確実に待ち構える死と腐臭の運命、この「虚無」の斧を、死を超えた「永遠の生命」に逆転する力の可能性を、イエスの生と死のドラマの内に追求し抜いた人、それがドストエフスキイでありその文学であるとして、今回の「発話」「問題提起」としたい。

(了)

関係する論考

[本論と関係する筆者の著書・論文は以下のものである]

1. 著作: 『^お墮^{にがよき}ちた^{ほし}苦文の星 —ドストエフスキイと福沢諭吉—』
(河合文化教育研究所、1997)

[1862年、日本とロシアの二人の巨人、ドストエフスキイと福沢諭吉がほぼ同時期にした西欧への旅を比較し、「近代化」がそれぞれの魂に如何なるインパクトを与えたかについて考察をしたもの]

2. 論文: 「ドストエフスキイにおけるイエス像」(『イエス研究史』所載)
(日本基督教団出版局、1998)

[『カラマーゾフの兄弟』に於けるアリョーシャの「ガリラヤのカナ」体験が持つ意味について考察をしたもの。特にこの体験が『亡きゾシマ長老の生涯』として具体的に結晶し深化し、現代におけるイエス伝・『第五福音書』編集のメカニズムとして解釈される可能性を論じた]

3. 論文: 『『罪と罰』、隠された女神たち、
— ラスコーリニコフの下宿空間をめぐって —』
(『論集・ドストエフスキイと現代 — 研究のプリズム —』所載)
(多賀出版、2001)

[ラスコーリニコフを死の底から復活させたのはソーニャである。しかしソーニャとの出会いの前、この青年は下宿の娘ナターリヤと婚約をしている。今は亡きこの婚約者との間に如何なる「春の夢」のドラマが存在し、それがラスコーリニコフの思想形成にどのような影響を及ぼしたかについて、『ノート』と決定稿からデータを集め、考察を加えたもの]

4. 創作: 「異聞・『罪と罰』 — 召使ナスターシャの回想 —」
(『ドストエフスキイ広場』No. 8 所載、ドストエフスキイの会、1998)

[上の1-3のデータ、殊に論文3の作業を土台に、ラスコーリニコフの今は亡き婚約者ナターリヤから、ソーニャへの魂の伝達のドラマを、召使ナスターシャの「手記」の形で考察したもの]

5. 論文: 「文学の中の家族 — ラスコリーニコフが属した三つの家族 — 」
(雑誌『家族ケア』所載、家族ケア研究所、2003、4月号 - 6月号)

[ラスコリーニコフの精神を、彼が属した三つの家族から、つまり故郷の「生家」と「婚約者ナターリヤ」と「ソーニャ」との間に形成されたものとして見てゆくと、人間の精神・魂の成長史として何が見えてくるか、考察したもの]

6. 著作: 『『罪と罰』における復活 — ドストエフスキイと聖書 —』
(近く河合文化教育研究所から刊行の予定) [→翌年 2007 に刊行]

[1-5 や今回の発表も含んだ『罪と罰』論の総決算。特に本論でも扱った「ラザロの復活」を中心に、ナターリヤやリザベータやソーニャらにも焦点を絞り、ドストエフスキイにおける聖書的思考を正面から扱ったもの]

★本論のドストエフスキイと聖書からの引用は、それぞれアカデミア版30巻本全集とネストレ・アーラント校定本(27版)から直接和訳した。

次回の「ドストエフスキイ研究会便り(24)」について

★私の『罪と罰』論は2007年に出版されましたが、それに先立つ10年ほどは、この作品について様々な角度からデッサンを繰り返していました。

★主人公ラスコーリニコフの「ナポレオン理論」。この青年と予審判事ポルフィーリィとの対決。「もうどこにも行き場がない」と呻きながらも、最後の審判での赦しを夢見るマルメラードフ。地獄の底でキリストへの信に生き、「死せるラザロ」ラスコーリニコフを復活に導く娼婦ソーニャ。同じくこのソーニャに深く胸を揺すぶられるニヒリストのスヴィドリガイロフ等々——『罪と罰』には、胸を打つ登場人物たちのドラマ、そして考えるべきテーマが満ちています。

★この作品と取り組んでいる内に、私はラスコーリニコフがペテルブルクに上京し、その直後に下宿の娘と婚約をした事実に興味を惹かれました。——婚約から二年後、腸チフスでこの世を去ってしまうナターリヤについて、作品の各所に散らばる情報を集めてゆくと、作者ドストエフスキイが、この婚約生活の内に、後のラスコーリニコフの思想と行動の原点となる重大な問題を、様々に描き込んでいることが浮かび上がって来ました。

★『罪と罰』の内に、密かに隠れたように存在する「女神」ナターリヤについて、次回から二回にわたり、当時の研究発表を掲載します。皆さんも楽しみながら、ラスコーリニコフの下宿空間に込められた「謎」の解明に挑んで頂き、『カラマーゾフの兄弟』と並び、ドストエフスキイ文学の代表作の一つ『罪と罰』について新たな関心を抱き、この作品が提示する人間と世界と歴史の問題、そして「超越」の問題について、新たな思索の契機として頂ければ幸いです。